習志野高校図書館ホームページ連載企画

《高校生のための本格ミステリ入門（日本編）》

執筆　大村　拓

第３回　「社会派全盛時代の本格推理」

～松本清張（せいちょう）・笹沢左保・土屋隆夫・都筑（つづき）道夫・中井英夫～

笹沢左保

松本清張

中井英夫

都筑道夫

土屋隆夫

1955 年になると日本は、劇的な経済発展を実現した高度経済成長期に突入した。そして、男性が「会社人間」とか「モーレツ社員」などとよばれたこの時代の雰囲気に呼応するように、「社会派ミステリ」の全盛時代がやってきた。

社会派ブームの到来

それは 1958 年（昭和 33 年）に**松本清張**が発表した『点と線』と◎**『眼の壁』（★913 マ 新潮社）**から始まった。この２冊はたちまち大ベストセラーとなり、その後の日本ミステリの方向性を決定づけてしまったのだ。それは、いわゆる「社会派」というジャンルを確立させ、「社会派でなければミステリにあらず」といえるような社会派の優越性を当然とみなす方向性であった。そこで、そんな目に見えない空気のような圧力が加わった結果、従来のような本格ミステリは文壇の片隅に追いやられていくことになる。

それでは社会派とはいったいどのようなミステリを指すのか。以下に解説してみよう。まず狭義の社会派とは、何らかの社会問題の告発をテーマにしたものと定義できよう。たとえ

ば、政治腐敗や企業犯罪といった社会的な巨悪を、ミステリの手法で暴いていくといったタイプの作品のことである。このタイプのミステリは、迷いなく社会派にジャンル分けすることができる。しかし、その先駆となった清張の２冊の中にはそれほどの社会問題の提起は含まれていないことから、実際の社会派の定義は、もう少し緩やかなくくりで行われているようだ。そのポイントを挙げてみると、以下の３点に集約されよう。その３点とは、①舞台の現実性、②捜査の現実性、③動機の重視である。

①舞台の現実性

まず事件の舞台となる場所は、現実に暮らしている人々にとって普通に身近なものでなければならない。たとえば、仕事場である大都市のオフィス街であるとか、接待に使う夜の歓楽街であるとか。そんなことは当たり前に思われるかもしれないが、それまでの日本ミステリの舞台といえば、欧米ミステリの世界をそのまま移植してきたようなおおよそ日本には不似合いな洋館などが通例であった。そして、そこに集まった仕事もしないで長期間滞在していられるような暇人たちの間で、事件が起こるのが常であった。これは、当時の人たちにとって現実にはまったくありえない設定で、とても感情移入できるようなものではなかっただろう。それを革新し、現実と地続きの世界を描くのが社会派の第一の条件である。

②捜査の現実性

探偵役は、警察官や検察官といった職業捜査官でなければならない。百歩譲って弁護士か新聞記者あたりまでが許容範囲だ。従来のミステリで主役を張っていたような私立探偵などは、現実の世界で犯罪捜査に加わることなどありえず、非現実の極みであるから、起用してはならない。ただし、たまたま巻き込まれてしまった一般人が探偵役を務めることは許されるが、同じ人が何度も事件に巻き込まれることなど現実にはありえないことなので、その登板は一度に限られる。また、その捜査方法も、聞き込みを中心とした現実的なものでなければならない。名探偵の神のごとき推理などは、絵空事なので、許されるべきではない。それが社会派の第二の条件である。

③動機の重視

解かれるべき謎の中心は、人間性の問題、すなわち普通の人間が普通に生活していく上で起こる問題が犯人の動機でなければならない。たとえば貧困や差別に端を発する犯罪、組織の保身のため個人が犠牲となる犯罪など、その動機には現実に生きる人々が共感できるような社会的な背景がなければならない。ここにこそ作家が最も心血を注がなければならないのである。これが社会派の第三の条件である。それに対し従来のミステリで謎解きの中心となっていたのは、犯人のトリックや、意外な犯人の正体などで、動機の問題は軽視されていた。せいぜい復讐や遺産相続といったお決まりのパターンに終始していればよかったのだ。

以上のように社会派は、ミステリのあるべき姿を従来のものから一変させてしまったのである。しかしよく考えてみれば、①②はクロフツが創始した作風であり、③もバークリーがまったく同様の主張をしていたことは、本稿の海外編（クロフツ・バークリーともに《本格ミステリ入門（海外編）》第 5 回参照）で詳述したとおりである。この点から見ると社会派ブームとは、クロフツもバークリーも本格派の作家であったのだから、元来本格ミステリとも両立しうるものであったことも理解できよう。

社会派ブームの背景

それではこのような社会派ブームは、どうして起こったのであろうか。その社会的背景をもう少し細かく分析してみよう。社会派ブームの始まった 1958 年とは日本が戦後の混乱期を脱し、未曾有の高度経済成長の時代に入った時である。高度成長のシンボルであった東京タワーの完成が同年であり、まさに映画『ＡＬＷＡＹＳ　三丁目の夕日』で描かれたような時代であったのだ。この時代の男たちは働けば働くほど、給料は上がり、国家も発展するとい

うことを疑わなかった。そんな彼らにとっての現実とは、どうしても仕事の世界ということになり、共感できる小説もやはり同じ世界観をもっていた松本清張の描くような世界、すなわち社会派ミステリの世界だったのである。一方、従来のミステリの描いてきたような日本のどこにもないような作りごとめいた世界はあまりにも空々しいとして敬遠された。また、横溝正史の描いた封建的な日本の農村社会もある意味リアルな存在ではあったのだが、集団就職などで大量に人口が都心に流入してきていた当時の世相の中では、徐々に大衆の共感を得られなくなっていた。ところでそれはあくまで男性にとっての現実でしかないのではないかと、疑問が浮かぶ人もいるのではないだろうか。

映画ポスター

確かに共稼ぎは少数であり、専業主婦が主流であった当時の女性にとっての現実とは、まさに家庭のことであり、社会派が描いたような「会社」の世界ではなかったはずだ。にもかかわらずミステリ界で男の世界だけがもてはやされたのは、それだけミステリが男性の読み物であった証しといえよう。今でこそミステリ読者の中心は女性といわれるが、当時はあくまでもミステリは男の娯楽だったのである。

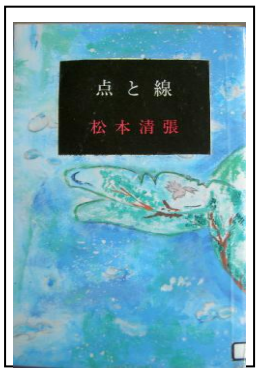
本格派の衰退

このような社会派ブームの中で、松本清張のような作風のみが価値をもち、従来のような本格ミステリは、「見せ物小屋」などと揶揄（やゆ）され、その価値を認められなくなってしまった。そんな中、横溝正史は執筆を一時中断し、高木彬光は社会派との融合を試み、鮎川哲也は「現実派」の鬼貫警部ものに力点を移していったことは、本シリーズ《高校生のための本格ミステリ入門（日本編）》の第１回・第２回で見てきたとおりである。まさに本格ミステリにとっては強い向かい風が吹いていた時代といってよいが、だからといって本格ミステリが絶滅したわけではなかった。社会派の形式を踏みながら、ちゃんと本格ミステリも書き継がれていたのである。確かに典型的な名探偵の存在は稀少となり、現実離れした謎の設定なども見られなくなった。しかしそんな中でも、論理で謎を解いていくいわゆる本格ミステリの秀作も数多く書かれてきたことは忘れてはならない。ただし、本格ミステリが本来もっていた子供じみた遊び心などは発揮しにくくなっていたことは間違いない。そこで、読者の常識を覆すような斬新な発想に基づく独創的な本格ミステリが生まれるようになるには、オイルショックによって高度経済成長を止められた 1970 年台なかばあたりまで待つしかなかった。なにせひたすら仕事に没頭していた当時のサラリーマンたちにとって、そのような仕事に関係のないものを楽しむ余裕などなかったのであろうから。

それでは以下に、「社会派ミステリ」全盛時代といわれつつも、この時代に書かれた本格ミステリの代表作を５作紹介してみよう。

１．松本清張（1909-1992）

◎『点と線』（**★913** マ　新潮社）（1958 年＝昭和 33 年）



［内容］九州博多付近の海岸で発生した、一見完璧に近い動機を持つ心中事件、実はその裏には恐るべき企みがひそんでいた。　汚職事件にからんだ複雑な背景と、殺害時刻に容疑者は北海道にいたという鉄壁のアリバイの前に立ちすくむ捜査陣…。しかし刑事たちの地道な調査で謎は一歩一歩解けていく。列車時刻表を駆使したリアリスティックな状況設定で推理小説界に「社会派」の新風を吹きこみ、空前の推理小説ブームを呼んだ秀作。

社会派ブームの到来を告げた本作は、名実ともに社会派ミステリの代表作であると同時に本格ミステリの秀作でもある。（ちなみに本作と同時にベストセラーとなった『眼の壁』の方は、典型的なスリラーであり、まったく本格物ではないので、本稿では取り扱わない。）この後、社会派の旗手とよばれるようになる清張だが、決して本格ミステリを否定していたわけではなかったのである。本作は、地元警察のベテラン刑事鳥飼と警視庁の三原警部補の二人が、互いに協力し合いながら丹念な捜査と地道な推理によって、犯人の構築した鉄壁のアリバイを徐々に崩していくという典型的なクロフツ・タイプの作品である。特に時刻表を用いた謎解きは、鉄道ミステリ好きにはたまらなく魅力的だろう。とりわけアリバイ作りに利用された「４分間の見通し」のアイデアは今でも語り草となっている。この「４分間の見通し」とは、始終列車が入線してくる東京駅のホームに一日のうちたった４分間だけ３つ先のホームまで見通せる瞬間があり、この４分間にたまたま目撃されたことから、容疑者に鉄壁のアリバイができるというアイデアである。しかしこの魅力的なアイデアも、よく考えてみるとまったく必然性がないことや、これとは別のメインとなるアリバイ・トリックもあまりに安易なものであることなどから、正直なところ本作は本格ミステリとしては難点が多いと言わざるをえない。そもそも、多作家である清張の作品は、トリックの創案には意外と熱心なわりには、その必然性や実効性に疑問のあることが多く、本格ミステリとしてはあまり高く評価することができない。あくまでも清張という作家は、社会派の要素を第一として評価すべき作家なのであろう。

それでも◎**『時間の習俗』（★913 マ　新潮社）**と◎**『砂の器』（★913 マ 1,2　新潮社）**の２作は、本格ミステリとしてだけ見ると、本作よりも優れている。特に『時間の習俗』は鮎川哲也が書いたのかと見紛うばかりの、トリックを重視した純本格物である。また『砂の器』は映画版が社会派映画の傑作としてあまりに有名であるが、原作は映画版とは随分雰囲気の違った真っ当な本格物である。清張の本格ミステリを楽しみたい人は、まずマスト・アイテム（＝必読の書）である『点と線』を読んでみてから、これら２作を味わってみるとよいだろう。

２．笹沢左保（1930-2002）

◎**『招かれざる客』（★913 サ 2　笹沢左保コレクション 2　光文社）（1960 年＝昭和 35 年）**

［内容］事件は、商産省組合の秘密闘争計画を筒抜けにしたスパイを発見した事が発端だった。スパイと目された組合員、そして彼の内縁の妻に誤認された女性が殺され、二つの事件の容疑者は事故で死亡し、一件落着したかに思われた。しかし、ある週刊誌の記事から事件に疑問を感じた倉田警部補が、鉄壁のアリバイと暗号、そして密室の謎に挑む。笹沢左保のデビュー作にして代表作となる傑作本格推理小説。

笹沢左保（本作刊行時の筆名は笹沢佐保）は、生涯に 350 冊もの著作を残した超人気作家である。その作風は本格ミステリのみならず、サスペンス、官能小説、時代小説と多岐にわたり、そのいずれにおいても一流の仕事をした。特に時代小説の代表作である「木枯し紋次郎」シリー

ズは、テレビドラマでも人気を博し、主人公木枯し紋次郎の決めぜりふ「あっしには関わりのねぇことでござんす。」は、当時の流行語ともなった。

TV「木枯し紋次郎」

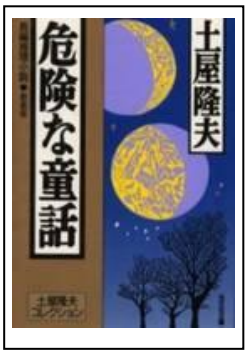
その笹沢のデビュー作が本作であり、惜しくも江戸川乱歩賞の受賞は逃したが、最終候補に残ったのを認められ刊行された。これは労働組合問題を背景とした会社人間たちの熾烈（しれつ）な世界をリアルな筆致で描いていく典型的な社会派ミステリだが、同時に凝った構成の下、惜しげもなく繰り出されるトリックや周到な伏線などは、本格ミステリ以外の何ものでもない。まさに社会派と本格派の融合に成功した傑作といえよう。作者自身もその点を強く意識しており、当時自らの作風を「新本格」と称していた。これは、かつての本格物のような非現実な世界ではなく、あくまでもリアルな世界観の中で、なおかつ謎解きの面白さに主眼をおいた作品を書くぞという、作者の意志表明であった。（しかしこの「新本格」という名称はあまり定着せず、現在普通に「新本格」といえば、1987 年の綾辻行人デビュー以降の、現実にとらわれずに本格ミステリ本来の遊び心に回帰しようとする作風を指すのが一般的である。ちなみに後者の「新本格」については、本シリーズ《高校生のための本格ミステリ入門（日本編）》の第５回で解説する予定である。）

初期の笹沢は本作を皮切りに、次々と本格ミステリの傑作を発表していった。この頃の代表作である◎**『霧に溶ける』（★913 サ 3　笹沢左保コレクション 3　光文社）**　、◎**『人喰い』**（日本推理作家協会賞受賞）**（★913 マ　講談社）**、◎**『空白の起点』（★913 マ　講談社）**、◎**『暗い傾斜』（別題『暗鬼の旅路』）（★913 マ　角川書店）**などは、『招かれざる客』と何ら差がないレベルの作品なので、本作が気に入った人は、そちらにも手を出してみるとよいだろう。中でも『霧に溶ける』は、ミス・コンテストの候補者が次々と殺されていくというサスペンスフルな設定の中、惜しげもなく多くのトリックを注ぎ込んだ本格物の力作である。『人喰い』もまた次々と繰り出される数々のトリックで読者を圧倒する。一方、『空白の起点』と『暗い傾斜』はトリックの量より質で勝負するタイプの作品だが、両作ともメイン・トリックとして人間心理を巧みに利用したアリバイ・トリックが創案されており、どちらも一読の価値がある。

最後に笹沢作品の欠点を指摘しておくと、社会派特有の難点として、時代の風俗を取り入れたがために時代の変化とともにその価値観が古びて見える点が挙げられる。笹沢作品においても、特に女性の恋愛観などは、現在の常識から見るとあまりにも古風すぎて、現在の読者が素直に感情移入することは難しいだろう。当時の読者に感情移入させようとリアルな時代の空気を取り込んだ社会派が、時代の変化とともに逆に感情移入しづらくなっていくとは、何とも皮肉な現象だ。したがってこのような社会派風の作品を読むときは、あたかも時代小説を読むような、少し距離をおいた感覚で読むとちょうどよいだろう。

３．土屋隆夫（1917-2011）

◎『危険な童話』（★913 ツ　光文社）（1961 年＝昭和 36 年）



［内容］仮釈放され刑務所から出てきた男は、ピアノ教師木崎江津子の家で殺された。発見者である江津子が容疑者として逮捕された。被害者の体に残った痕跡から、兇器は片刃のナイフと推定されたが、その物証がどうしても発見できない。焦る捜査陣をあざ笑うかのように、一枚の葉書が届けられた。容疑者の不起訴が決定した中、あくまでも容疑者の有罪を信じる木曾刑事の執念の捜査ははたして実を結ぶのか。論理とロマンチシズムが鮮やかに結合した推理小説。

『推理小説が文学たり得るか否かについては、多くの議論がある。あるものは、謎の提出とその論理的解決のみが、この小説の宿命であると称し、あるものは、それを児戯に類するものとして、謎を生み出す人間心理の必然性をこそ、まず考えるべきであると主張する。トリックか。人間か。わが子よ。私は不遜にも、文学精神と謎の面白さの全き合一を求めて歩み出したのだ。』

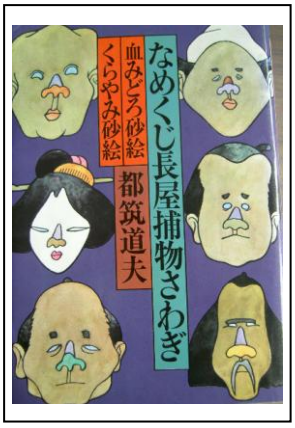
冒頭の引用は、**土屋隆夫**が社会派と本格派の融合に作家生命を懸けて挑まんとする熱い思いを表明した言葉である。そして彼こそがこの難業を完全に成功させた作家だったといってよいだろう。土屋は典型的な寡作家で、この点において多作家の松本清張や笹沢左保とは対照的である。そのため一作一作手間暇をかけて作られるその作品は、どれもが一流の工芸家による手工芸品のような精緻な輝きを放っている。

さて本作は、土屋のこのような姿勢が最初に結実した記念碑的作品である。ここには読者を驚倒させるような大胆な仕掛けがあるわけでなく、またその分量も少なめで超大作といえるような重厚さもない。それでいてメインとなる凶器消失トリックを始めとするいくつものトリックが実に念入りにこしらえられており、手作りの魅力にあふれているのである。実際、土屋は作中で使うトリックはすべて実証済みであるというのだから、ここまで手間暇かけてくれれば文句のつけようがなかろう。また土屋の特長の一つである文学味もここにはよく表れている。『危険な童話』というタイトルにもあるように、本作には作者が自作した童話が挿入されているのだが、この童話が事件の真相と密接な関係をもっているのである。そしてその童話はそこはかとなく文学的香気を漂わせ、作品全体に格調を与えているのだ。

土屋は寡作家だけに当たり外れの少ない作家だが、特に初期の作品に傑作が集中している。本作以外では◎**『影の告発』**（日本推理作家協会賞受賞）、◎**『赤の組曲』**、◎**『針の誘い』**、◎**『盲目の鴉』**(以上、４冊とも**★913 ツ　光文社)**あたりは非常にレベルの高い作品なので、是非こちらも読んでもらいたい。ちなみに、これらはいずれも**千草泰輔検事**（ちぐさたいすけ）が探偵役を務めている。『影の告発』『赤の組曲』は、最初はあいまいだった事件の背景が徐々に明らかになっていく過程が大変魅力的な作品だし、『針の誘い』はサスペンスと意外性に満ちた誘拐ものの傑作である。また『盲目の鴉』は土屋の文学的資質が最も色濃く反映した作品である。

４．都筑道夫（1929-2003）

○『血みどろ砂絵』（『ちみどろ砂絵』）（『なめくじ長屋捕物さわぎ　血みどろ砂絵　くらやみ砂絵』所収　**★913 ツズ 1**　桃源社）（**1969 年＝昭和 44 年**）

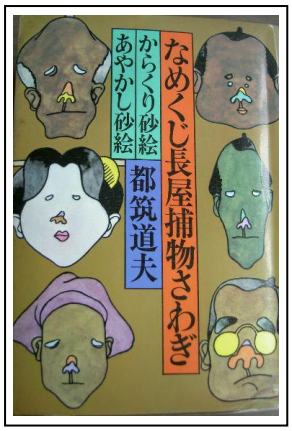


［内容］江戸は神田の橋本町、ものもらいや大道芸人ばかりが住んでいるおかしな長屋に、センセーと呼ばれる推理の特技をもった砂絵描きがいた。当時珍しい合理的精神の持ち主で、犯罪事件が起こると、わずかな礼金にあずかろうと、見事な推理で謎を解く。センセーと長屋の連中が、よってたかって解き明かした奇妙な事件の数々…。

四季折々の江戸の風物を背景に、ユーモラスな本格推理を融合させた、異色の傑作捕物帖。

都筑道夫は、笹沢左保や土屋隆夫が目指したのとはまったく違った方向性で、本格ミステリの現代化を図った作家である。彼は、海外ミステリの紹介を主とした雑誌の編集長を務めたほどの人物であったので、海外ミステリの最先端事情にも詳しく、その観点から本格ミステリのあるべき姿を革新しようとしたのである。その意味において、日本限定のムーブメントであった社会派との融合にこだわることはなかった。そんな都筑の目指した方向性とは、トリックよりもロジックを重視するというスタイルで、彼はそれを「モダーン・ディテクディヴ・ストーリー」（ディテクディヴ・ストーリーとは探偵小説の意）と名づけた。ロジック重視の方向性は、アメリカでエラリー・クイーン（《本格ミステリ入門（海外編）》第３回　参照）が確立したスタイルであるが、都筑もそれにならってあくまでも論理による推理の道筋の面白さで、本格ミステリを再生しようとしたのである。しかし残念なことに、彼の方向性は間違いなく本格ミステリの正しい未来を指し示していたにもかかわらず、実作においてはそれを証明するような傑作を残すことはできなかった。彼のこの方面での代表作である◎**『七十五羽の烏』（★913 ツ　光文社）**などを見ても、トリックの切れ味が乏しい上に、ロジックにもさほどの切れは見られず、どっちつかずの作品に終わってしまっている。逆に彼の代表作といわれる◎**『猫の舌に釘をうて』（★913 ツ　光文社）**や◎**『三重露出』（★913 ツ　光文社）**などは、凝りに凝りまくったスタイルで書かれた、トリックもロジックも関係ない個性あふれる作品で、もはや分類不能の怪作・奇作といってよい。

その中で、都筑の代表作としてふさわしい作品を挙げるとすると、やはり『血みどろ砂絵』を第１作とする**「なめくじ長屋捕物さわぎ」**シリーズであろう。その名のとおり、これは江戸時代を舞台とする時代物であり、貧乏長屋に住むインテリで本名不詳の通称**“砂絵描きのセンセー”**が名推理を披露して一見怪異としか見えない謎を解く、典型的な本格短編集である。時代を科学的精神に乏しい江戸時代に設定したことが逆に功を奏し、現代物でやれば馬鹿馬鹿しく見えるような妖怪の仕業としか思えないような怪異な謎の設定が、不自然なく扱われているのである。本作にも、渡し舟の上から忽然と消え失せた男の謎や、タヌキの仕業としか思えない見立て殺人など、本格ミステリの直球勝負ばかりが目白押しで実に頼もしい。つまり都筑が軽視したトリックがかえって面白いのである。



本シリーズはこの後書き継がれていき全 11 冊にまとめられているが、やはり初期のものほど出来がよい。『血みどろ砂絵』が気に入ってもらえたなら、続けて第２作の**○『くらやみ砂絵』（『なめくじ長屋捕物さわぎ　血みどろ砂絵　くらやみ砂絵』所収　★913 ツズ 1　桃源社）**、第３作の**○『からくり砂絵』**、第４作の**○『あやかし砂絵』**（第３作・第４作は、**『なめくじ長屋捕物さわぎ　から**

くり砂絵 あやかし砂絵』所収　★913 ツズ 2　桃源社）と読み進めていくとよいであろう。読み進めていくことで、センセーに率いられて活躍する長屋の個性豊かな面々にも愛着がわき、読む楽しさも倍増することであろう。

５．中井英夫（1922-1993）

◎『虚無への供物』（★913 ナ 1-2　講談社）（1962 年＝昭和 37 年）

［内容］昭和 29 年の洞爺丸沈没事故で両親を失った蒼司・紅司兄弟、従弟の藍司らのいる氷沼家に、さらなる不幸が襲う。密室状態の風呂場で紅司が死んだのだ。そして叔父の橙二郎もガスで絶命。殺人なのか事故なのか。駆け出し歌手・奈々村久生らの推理合戦が始まった。その推理合戦は「五色不動」「植物学」「仏教典」「薔薇」「アイヌ」「過去の転覆事故」「シャンソン」などの蘊蓄を傾けながら演じられる絢爛たるものであった。そして最後に読者を直撃する衝撃的な真相とは？　ミステリ史上に燦然と輝く究極の問題作。

本作は幻想小説作家である中井英夫が、生涯でただ一冊だけ残したミステリ作品である。中井は本作の前半部分だけを江戸川乱歩賞に応募したのであるが、最終選考まで残ったのに惜しくも受賞には至らなかった。そこで後半部分を書き足して刊行したところ、やがてミステリ・マニアから熱狂的に支持されるようになり、現在ではミステリ史上に残る名作と認められるまでになった。現に文藝春秋が行った過去２度にわたるミステリのオールタイム・ベスト投票では、２度とも横溝正史の『獄門島』に次ぐ第２位にランクされたほどである。(ランキングは『東西ミステリーベスト１００』1986 年版　★901 ブ 文藝春秋、『東西ミステリーベスト１００』2013 年版　★901 ブン　文藝春秋)で見ることができる）

さて本作の内容であるが、ある呪われた一族内に起こった連続殺人をめぐって、素人探偵たちが喜々として推理を披露しあうという物語である。その謎も本格ミステリ定番の密室殺人をはじめ魅力的なものばかりだし、様々な蘊蓄を傾けながら展開される推理合戦も、それ自体が本格ミステリ本来の楽しさに満ちあふれている。つまり一見するとこれはただの典型的な本格ミステリであって、社会派の洗礼はかけらも受けていないように見えるのだ。そのため社会派全盛時代のこの時代において、どうしてこのような旧タイプの作品が世に出ることを許されたのか、疑問すら浮かぶほどである。しかしこの長大な作品を最後まで読むと、これはただの本格ミステリという枠に収まるようなありきたりのものではなく、本格ミステリの在り方そのものに対する批判すらその中に含み込んだジャンルを超越した作品であることに気づかされることになる。つまり本格派か社会派かといった論争が低次元のものに見えてしまうほど壮大な構造を有した作品なのである。ちなみに、読む側と読まれる側の境界すらなくなってしまったこのようなタイプのミステリを、メタ・ミステリ（またはアンチ・ミステリ）とよぶ。本作は、作中に提示された謎をただきれいに解けばいいというだけの作品ではないので、ミステリに合理的な解決だけを求めて読む保守的な読者には、本作のように論理を超越した構造は理解不能なものとなり、評価しようのないものとなるだろう。

この点で、この『虚無への供物』が、戦前に書かれた不条理ミステリの代表作小栗虫太郎著◎**『黒死館殺人事件』（★913 オ　社会思想社、★913 ニ 6　『日本探偵小説全集 6　小栗虫太郎集』　東京創元社）**、夢野久作著◎**『ドグラ・マグラ』（★913 ユ 1,2　角川書店、★913 ニ 4　『日本探偵小説全集 4　夢野久作集』　東京創元社）**とともに「三大奇書」とよばれるゆえんなのである。

以上のような点から、本書はミステリ初心者がいきなり手を出すと火傷するような作品といえるかもしれない。しかしこのように不条理なほどに壮大なテーマを完全には理解できなくとも、謎と推理の楽しさは充分味わえるので、意外と読みづらいということはない。高校生諸君も怖いもの見たさで勇気をもって読んでみると、案外面白く感じられるかもしれない。

◎ミニ特集　江戸川乱歩賞

本文の中で、笹沢左保や中井英夫が江戸川乱歩賞の最終選考に残ったことを書いた。ついでに言うと、土屋隆夫のデビュー作も乱歩賞の候補作である。そこでここではミニ特集として、江戸川乱歩賞について説明してみよう。

この賞は 1955 年、江戸川乱歩の寄付金をもとに、わが国のミステリ界の功労者を顕彰するために創設されたものである。第 3 回からは、毎年公募に応じてきた新人作家の長編作品の最優秀作に賞が授与されるようになり、やがて日本ミステリ界における最高の権威をもった登竜門として認知されるまでに成長していくのである。実際その受賞者の顔ぶれの中には、西村京太郎（第 11 回）、斎藤栄（第 12 回）、森村誠一（第 15 回）、東野圭吾（第 31 回）ら、ベストセラー作家たちが多数含まれている。そのため、ミステリ作家としてのデビューを夢見る作家志望者たちにとってのあこがれの的となっているのだ。ただし近年では、横溝正史賞、鮎川哲也賞、メフィスト賞などデビューへのステップは何通りも存在するため、乱歩賞のステータスは相対的に低下しているのが実態ではあるが。

さてそんな乱歩賞のはえある最初（第 3 回＝1957 年）の受賞者は**仁木悦子**である。受賞作◎**『猫は知っていた』（★913 ニ　ポプラ社）**はクリスティーを思わせるオーソドックスな本格物で、その健康的で癖のない作風は、多くの一般読者から歓迎された。くしくもこの年は、松本清張による社会派ブーム勃興の前年にあたり、社会派の匂いすらしない作品が受賞した例外的なケースとなった。現に翌年からは、少なくとも社会派的なスタイルをとった作品ばかりが受賞していくこととなる。そんな中で、本格派として注目しておくべき作家を何人か紹介しておこう。

まず第 7 回（1962 年）に、◎**『枯草の根』（★913 チ 2　集英社）**で受賞した**陳舜臣**（ちんしゅんしん）は、その名のとおり台湾国籍をもつ人（ただし日本生まれ）で、受賞作は中国人探偵陶展文（とうてんぶん）が活躍するオーソドックスで風格あふれる本格物であった。以降、辛亥革命が絡んだ◎**『炎に絵を』（★913 チ 1　集英社）**や唐時代の中国を舞台とした表題作を含む短編集◎**『方壺園』（★913**

チ 中央公論新社）など、いずれも中国にちなんだ本格物という独自のスタイルを確立していった。

次いで第 13 回（1967 年）、海渡英祐（かいとえいすけ）が受賞した◎『伯林（ベルリン）－一八八八年』（★913 カ　講談社）は、ベルリン留学時代の森鴎外が密室殺人の謎を解くという、斬新な趣向をとっている。高校生諸君にとっては、国語の授業でお馴染みの『舞姫』の世界が、そのまま作品の舞台となるのであるから、興味を感じずにはいられないだろう。この海渡英祐という人は、あの高木彬光の助手をしていたことがあることからも推察されるように、本格ミステリを扱う腕は一流のものがあり、特に受賞後第 1 作である◎『影の座標』（★913 カ　講談社）は、当時としては珍しくエラリー・クイーンばりのロジックを駆使した本格物の知られざる逸品である。

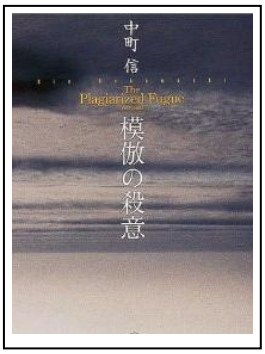
最後にもう一人、第 27 回（1981 年）の受賞者長井彬（あきら）を取り上げてみたい。その受賞作◎『原子炉の蟹（かに）』（★913 ナ　講談社）は、その名のとおり原子力発電所内での殺人事件を扱った本格物である。しかしこの作品の真価は何といっても原発の抱えている問題を余すことなく取り上げている点で、放射能漏れの問題から、放射性廃棄物の処理問題、さらには下請け作業員の被曝問題まで、その危険性について警鐘を鳴らしている硬派な社会派ミステリなのである。現在の福島原発事故の深刻な現状を鑑みるに、あの時国民はこの作品の指摘する問題点になぜもっと真剣に耳を傾けなかったのかと、悔やまれてならない。

私の一押し!!

例によってこのコーナーでは、一般的評価とは関係なく、私が個人的に偏愛する作品を紹介していきたい。

中町信（しん）（1935-2009）

◎『模倣の殺意』（★913 ナ　東京創元社）（1973 年＝昭和 48 年）



（別題『新人賞殺人事件』『新人文学賞殺人事件』）

［内容］七夕の夜、坂井正夫が服毒してアパート 4 階の自室から転落死した。推理新人賞を獲得して 1 年、未だに受賞第一作が没になったままなことから、創作上の行きづまりが原因の自殺と推定された。しかし、同人誌仲間でフリーライターの津久見伸助と坂井の恋人で編集者の中田秋子だけは、疑惑を抱いて調べはじめたところ、坂井と名乗る男から秋子へ電話が入り、やがてまた、七夕の夜が巡って来た。著者が絶対の自信を持って読者に仕掛ける超絶のトリック。

中町信は、社会派全盛時代にもかかわらず、ぶれることなく本格ミステリのみを書き続けた奇特な作家である。そんな彼の得意とした技は**「叙述トリック」**であった。叙述トリックとは、犯人が捜査側に仕掛ける通常のトリックに対して、作者が読者に対し直接仕掛けるトリックのことを指す。つまり作者がその記述を通して読者を引っかけるタイプのトリックのことである。そもそも本格ミステリの大前提として、犯人はいくらでも嘘をついても許されるが、作者は絶対に読者に対して嘘をついてはならないというルールがある。これは作者の記述が信頼できなければ、そもそもミステリなど成立しえないわけだから、絶対必須の条件だと言ってよい。そしてそのルールの下での叙述トリックであるから、ここでは作者は決して嘘をつかないで、しかも読者を間違った方向に錯覚させるという高等テクニックを駆使しなければならないことになる。それだけ難易度が高いトリックなのだ。近年では、特にこの叙述トリックの研究が尽くされた結果、様々なアイデアで読者をだましてくれるようになったが、昭和の時代には結構珍しいことであった。

中町はそんな中、叙述トリックを得意とした珍しい作家なのだが、本作も作者の第１作にして、十八番（おはこ）の叙述トリックが見事に決まった傑作なのである。実のところこのタイプの作品は､読者のお楽しみのためには叙述トリックがあること自体伏せておくほうがよいのだが、これを抜きにしては、中町の魅力を充分に伝えられないので、ここは思い切って明かさせていただく。それでもミステリ初心者の皆さんでは、決して作者の仕掛けは見抜けないと思う。本書はそれだけ巧みに仕掛けられており、読者は結末で必ずや驚愕することだろう。優れた叙述トリックとはどのようなものか。本書で是非体験してもらいたい。

ところで、本コーナーは、一般的評価とは関係なく私個人の趣味で作品を紹介する場なのだが、実は本書は現在ベストセラーとなっているということなので、「一般的評価」も十分高いということになってしまい、本当はこのコーナーにはふさわしくないかもしれない。しかし、本作の評価が高まったのは実のところごく最近のことで、2009 年に作者が亡くなった後のことなのだ。生存時は、中町といえば、一部のコアなマニアだけが熱烈に支持する売れない作家であった。本書などはまさに「知られざる名作」の典型だったわけだが、それが近年突如売れるようになったとは、さぞや作者も墓の中でびっくりしていることだろう。そこで、死後に評価が高まった大画家ゴッホになぞらえて、中町信のことを「ミステリ界のゴッホ」と名づけてみようではないか。

【注】 1.◎『　』で表したものは、当時あるいは現在でも出版されている本の書名です。
　　〇「　」は、小説の題名です。
　　2.★で表したものは、習志野高校図書館が所有している本です。NDCも表記します。
　　3.小説の内容については、書体を違えています。

次回は　第４回「〈新本格〉勃興前夜の名手たち」
～泡坂妻夫 連城三紀彦 島田荘司 笠井潔～ です。

2014.1.20 更新